

# 「読解力」育成に関する研究

——「読書力」「国語力」との関係性を手がかりに——

阿 部 祐 子

(開沼ゼミ)

キーワード：読解力、読書(力)、国語(力)、本(書物)

## はじめに

今日、日本人の「読解力」が低下してきていると言われている。このことが指摘され始めるきっかけとなったのは2003年にOECD（経済協力開発機構）により実施された学習到達度調査（PISA）である。本調査の結果、日本人の子どもの「読解力」は以前に比べ順位が下がり、得点も対象40ヶ国の平均点前後まで落ちていることが明らかになった。

この調査の翌年、2004年に文化審議会から出された答申『これからの時代に求められる国語力について』では、「読書力」は「国語力」の中核として定義されていると同時に、「国語力を高める上で読書が極めて重要である」とも明記されている。以上から、「国語力」と「読書力」は不可分の関係にあり、両者は「読解力」を向上する上で必要不可欠な力と捉えられていると解されよう。

また、2005年には文部科学省が『読解力向上プログラム』を発表している。同プログラムでは、「読解力」低下の原因として子どもたちの「読書離れ」が指摘されている。これは2000年の学習到達度調査において「読書習慣がある子どもほど読解問題の得点が高い傾向にある」ということが明らかになった点に根拠が置かれている。以

上から、「読書」は「読解力」を向上するための必要条件だと考えられていると解される。

さらに本プログラムでは、「読書を通じて読解力を向上させる」視点のもとに、重点目標として「朝の読書の推進」が掲げられている。また目標達成の手段として、「国語力」の向上を目指すための「学習指導要領の見直し」と「授業の改善・教員研修の充実」と同時に、「読書力」の向上を目指した「読書活動の支援充実」が掲げられている。以上から、「読解力」の向上には「国語教育」と「読書活動」の推進と充実が不可分の関係であると捉えられていることが分かる。

しかし、「国語教育」や「読書活動」といった「読解力」と密接に関わると指摘されている現行の活動が、果たして本当に「読解力」と連結し、その能力を向上させることができるのだろうか。本稿は以上の問題意識に立ち、「読解力」を向上する上での現在の「国語教育」および「読書活動」の問題点を明らかにすることを目的とする。

そこで、まず第1章において、そもそも「読書」と「国語」は直接連動する関係にあるのかという疑問の下、「読解力」「国語力」「読書力」に関する諸定義について、先行研究をもとに整理分析し相互の関係性について考察する。続いて第2章では、現行の読書活動の現状と課題について分析する。そして第3章では、現代の「読書」と「読解力」との関連性および今後の方向性に対す

る検討を行う。

## 第1章 「読解力」「国語力」「読書力」の関連性

### 第1節 「読解力」の定義と構成要素

「読解力」向上を目指した取り組みについて考える前に、まず「読解力」の特性について整理したい。「読解力」とは文字通り「読解」する力である。そこで、まず「読解」の辞書的定義を示したい。「読解」の意味は、『広辞苑』（岩波書店）では「文章を読んでその意味を理解し解釈すること」とされており、『明鏡』（大修館書店）では「文章を読んでその意味を理解すること」とされている。

次に、「読解力」の定義について考えたい。沖山光は「読解力」を「文と文との相互依存関係から見た内面的、生産的な意味を読み取るという真の能力である」と定義し<sup>1)</sup>、竹井成夫は「必要なときに必要なスピードで必要な内容を的確に取捨選択する力」と定義している<sup>2)</sup>。このことから、「読解力」は「情報の読み取り・取捨選択に関す

る力」と定義できる。以上のように考えれば、「読解力」は「情報を読み取る」点において「情報活用能力」と類似している。文部科学省『情報に係る学習活動の具体的展開について—ICT時代の子どもたちのためにすべての教科で情報教育を—』によると<sup>3)</sup>、「情報活用」とは「情報の収集、判断、発信という一連の情報伝達過程のことである」と説明されている。これを「読解力」の定義と照らし合わせると、「読解力」は「情報活用」における「判断」の部分にあたることが分かる。以上を総括すれば、「読解力」とは「何らかの情報を受け取ってから発信するまでの間における思考活動により育まれる能力」と捉えることができる。

次に「情報」の「判断」に関わる能力である「読解力」の構成要素について述べたい。「読解力」の構成要素として沖山光は「文章全体を要約する力」と「文章全体を見通す論理的思考力」を挙げている<sup>4)</sup>。また白井勇は「読解力」の構成要素は「文字・語彙を認知する力」「批判する力」「文の事実を読み取って要約する力」「語法の理解力」であると述べている<sup>5)</sup>。これらの要素は「文

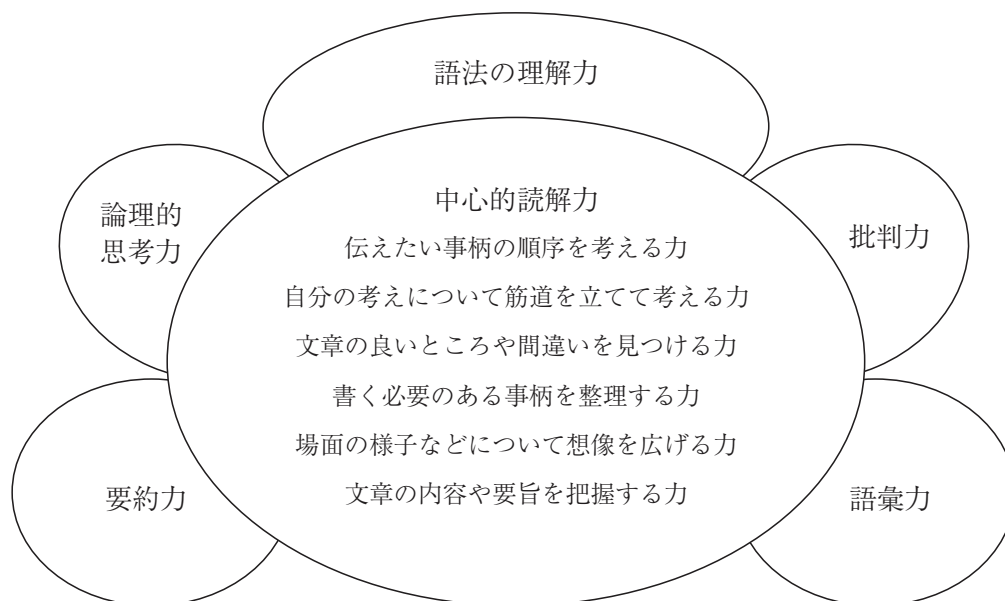


図1 「読解力」の構成要素  
(注：沖山 光『読解の基本的学習構造』をもとに筆者作成。)

章に関する要素」という点で互いに関連しているだけでなく、重なりを持つ領域もあるといえる。その領域の中心を構成している要素について、2005年の『読解力向上プログラム』では、「読解力は教科国語を中心として育まれるべきである」と指摘されている。このことから、教科「国語」で育成する「読解力」は、「中心的読解力」と称することができる。以上の検討結果を図示したものが図1である。

## 第2節 「国語力」の定義と概要

本節ではまず「国語力」に関する定義を行う。前節の整理に従えば、「国語力」には「中心的読解力」が必ず包含されることになる。つまり「国語力」には「中心的読解力」を育む領域とそれ以外の領域が存在するものと考えられる。さらに文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』によれば、「国語力」は「教科国語の指導によって育まれるべき力」であり、「コミュニケーション能力の基盤をなすもの」とされている。

前節で述べたように、「読解力」は「何らかの情報を受け取ってから発信するまでの間における思考活動により育まれる能力」である。この能力は情報活用という「判断」の過程で育まれる能力である。したがって、「読解力」の中心である「中心的読解力」を育む「国語力」の領域もまた「判断」の過程に関連した要素により構成されるべきであると考えられる。それゆえ、「中心的読解力」を育む領域以外の領域については、情報活用という「収集」「発信」の過程に関連した要素により構成されるべきである。

以上の点を踏まえ、『小学校学習指導要領（国語編）』を参考にしながら「国語力」の2つの領域について考えたい。『小学校学習指導要領（国語編）』では、「国語力」をさらに「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」の

4領域に分類している。この中で特に「発信」の過程に関連した要素を多く含んでいるのは「話すこと・聞くこと」「書くこと」の2領域である。一方、「判断」の過程に関連した要素を多く含み「中心的読解力」を育む領域は主に「読むこと」の領域である。また「言語事項」については、「話すこと・聞くこと」「書くこと」及び「読むこと」の内容の基本ともいえる語彙や文法などについての項目が多いことから、複数の領域にまたがっていると考えられる。以上から、「読むこと」に関する諸項目は「中心的読解力」に含まれていることが分かる。同時に、「読むこと」して指摘されている項目は主に「読書」に関わるものばかりであることから、「読書」は「中心的読解力」の領域に含まれているといえる。

## 第3節 「読書力」の定義と概要

「読書力」の定義を考えるにあたり、まず「読書」について定義したい。『広辞苑』（岩波書店）『大辞林』（三省堂）においては、いずれも「書物を読むこと」とされている。また文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』では、「読書」を「文学作品を読むことに限らず自然科学・社会科学関係の本や新聞・雑誌を読んだり何かを調べたりするために関係する本を読んだりすることなども含めたもの」と定義している。これらの「読書」の定義に共通しているのは「本（書物）を読む」点を重視していることである。

そこで次に「本」の定義について考えたい。『広辞苑』（岩波書店）によると、「本」は「綴って冊子とした書物」とされており『大辞林』（三省堂）では「書物・書籍」とされている。このことから「読書」は「書物」という媒体に基づいて行われる活動と解される。

以上を踏まえ、続いて「読書力」について定義したい。脇明子は「読書するための能力」である

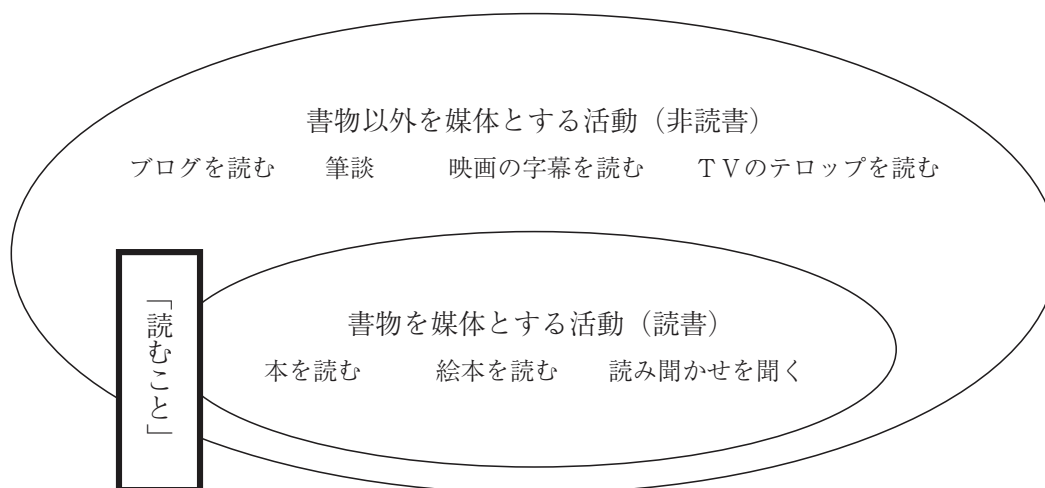


図2 従来の「読書」の定義による分類  
(注：『広辞苑』『大辞林』等をもとに筆者作成。)

と述べている<sup>6)</sup>。この定義と上記の「読書」の定義とを総合すると「読書力」は「書物」という媒体を通じて行われる活動と解される。また、文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』では、「読書力」は「国語力の『考える力』『感じる力』『想像する力』『表す力』のいずれにも関連しており国語の知識などの領域とも密接に関連している」と述べられている。以上から、「読書力」は「国語」と密接に関連しているといえる。

これらを踏まえ「読書」の領域について考えたい。そこで、現代の「読書」とそれに関連する諸活動を従来の「読書」の定義に沿って分類した(図2)。図2を一見して分かるように、従来の定義に従えば、「映画の字幕を読む」活動のような文字を読む活動は「書物」を媒体としていないので、「読書(書物を媒体とする活動)」の領域には含まれない。このことから、従来の「読書」の定義においては「読むこと」と「読書」を同等のものとして捉えるのではなく「書物を読む」ことのみを同等として捉えていることが分かる。以上の点を踏まえた上で、次節では「国語力」「読書力」「読解力」の関係性について述べたい。

#### 第4節 「国語力」「読書力」と「読解力」との関係性について

本節ではまず「国語力」と「読解力」との関係性について考えたい。文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』では、「読解力」は「教科国語を中心として育まれるべきである」とされている。このことから「読解力」は「国語」を中心としつつ「国語」以外の教科においても育まれるべきものだという主張が看取できる。また、沖山光も「読解力は国語によって育まれる」と指摘している<sup>7)</sup>。これらのことから、「読解力」とりわけ本稿で整理している「中心的読解力」は、「国語」を中心として育まれるものだということが分かる。

次に「読解力」と「読書力」の関係性について確認しておきたい。「はじめに」で述べたように、「読書力」は「国語力」の中核として定義づけられている。また第2節で述べたように、「国語」における「読書」活動は全て「中心的読解力」に関するものである。このことから「(「国語」における)読書力」は「中心的読解力」に包含されるといえる。また「国語」における「読書活動」を通じて育む「読書力」は、「中心的読解力」の一部、すなわち音声読解を含まない文字読解の領域



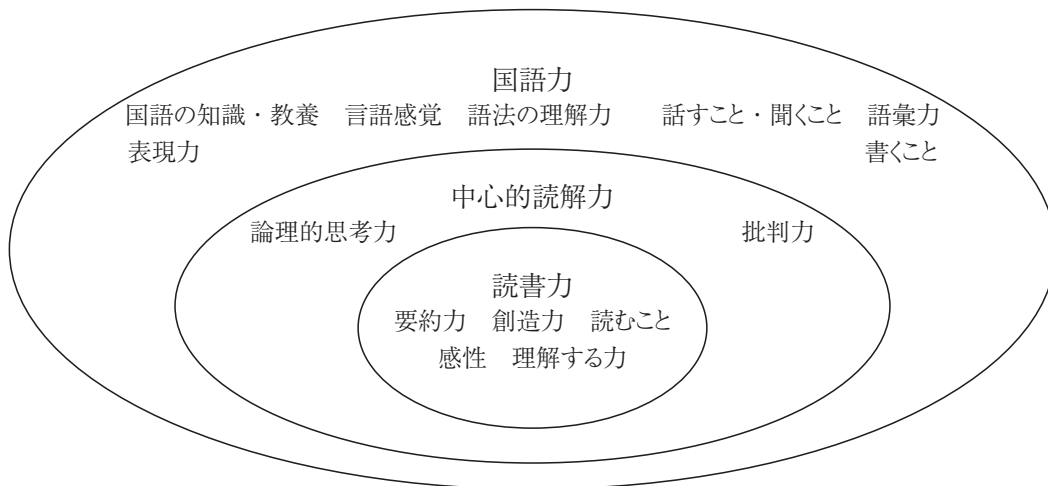


図3 「国語力」「中心的読解力」「読書力」の関係図  
 (注：文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』をもとに筆者作成。)

を構成するものと解される。このため「読書力」は「国語力」の一部に含まれていると捉えられているものの、「国語」と「読書力」とは中心は共有しているが、必ずしも完全に重なり合う領域ではないということが分かる。以上の解釈を図示したものが図3である。

しかし、TVやPC（パーソナル・コンピュータ）のようなメディアが普及している現代社会においては、図2で「読書」的活動と分類した「本（書物）を読む」活動よりも、「TVのテロップを読むこと」などの「非読書」的活動と分類した活動によって「文字」と接する機会が多くなってきている。それにつれて現在の「（従来型の認識における）読書」が生活に占める割合は日に日に狭まってきている。こうした現状を踏まえ、現在の「読書」における「読解力」向上の取り組みの課題を以下に示したい。

第1節でも述べたように、「読解力」とは「何らかの情報を受け取ってから発信するまでの間における思考活動により育まれる能力」である。現代社会において、この定義に含まれる「何らかの情報」を受け取る媒体は、いわゆる「書物」だけではない。しかし、「読解力」向上を目指した現在の取り組みにおいて重要視されているのは従来

のままの「書物」を媒体とした「読書」の推進である。これでは現代社会で求められている現代型「読書力」を育むことは出来ない。

このように従来の「読書」が「書物」媒体限定の活動であったため、「中心的読解力」が日常生活で必要とする力と乖離してしまっている。この状況を「読解力」の低下と捉え、政策サイドが打ち出した活動が「朝の読書（＝朝読）」である。だが、この朝読も「書物」媒体に限られたままの活動であるため、旧来の「読書力」向上に資することはあっても、現代型な「読書力」の向上には結びつきにくくなっているのではないだろうか。そして、このことが「国語力」「読解力」にも何らかの影響を与えているのではないだろうか。

以上の点を明らかにするために、次章では現行の「読書」を取り巻く現状について述べたい。

## 第2章 「読書」を取り巻く現状と課題

### 第1節 現代型「読書」の領域について

第1章で述べたように、「読書」は「書物を読むこと」と定義されている。しかし、現代社会において文字を読む媒体は「書物」だけではなくなっている。例えば、テロップを多用したTV番組

の増加やインターネットの普及などにより日常生活の中で本（書物）以外の手段により「文字」と接することが多くなっている。こうした現状を踏まえてみると、現在問題視されている「読書離れ」の背景としても、書物媒体主義に基づいた「読書」と日常生活における「読書」との乖離が課題として指摘できよう。

こうした現状にも関わらず、「読解力」向上を目指した現在の取り組みにおいて重要視されているのは、旧態依然の書物媒体主義による「読書」の推進である。これでは現代の社会で求められている現代型「読書力」を育むことは出来ない。そこで本章では、現代社会に応じた現代的な「読書」の領域について再考をはかりたい。従来の「読書」の領域は、図2に示したように「書物」を媒体とした活動のみに限定的に把握されてきた。しかし、現代的な「読書」の領域は「書物」ではなく「文字」を含むあらゆる媒体を対象とした活動として広く捉え直すべきだと考える。このことにより、現代型「読書」とは広く「文字をベースとした情報を読み取ること」と定義することができよう。この定義に沿って考えてみると、従来型「読書」活動には含まれていなかった「映画の字幕を読むこと」なども現代型「読書」の領域

に含まれる。

そこで、従来型「読書」の定義に沿って活動を分類した図2を、現代型「読書」の定義に沿って分類し直し、示した結果が図4である。図4を一見して分かるように、「文字」を介する活動であれば、その媒体が「書物」ではなくても「読書」的活動の領域に含めることができる。つまり、現代型「読書」においては「読書」と「読むこと」をほぼ同等の活動と捉えており、「書物」に限定されていた従来型「読書」と比べると日常生活により根ざした活動と解することができよう。

従来の「読書力」は、第1章で述べたように「中心的読解力」と「国語力」の中核に位置していると解される。しかし、現代の「読書力」を現代型「読書」の定義に沿って考えると、「読書」の領域は拡大しており、これらの諸活動が「国語」以外の活動を相当包含している事実に鑑みても、もはや「国語」だけで育むことはできない力といえよう。同様に、現代の「中心的読解力」にも「国語」だけではカバーできない領域も存在するものと考えられる。そこで、次節では現代型の「読書力」および「国語力」と「中心的読解力」の関係性について述べたい。

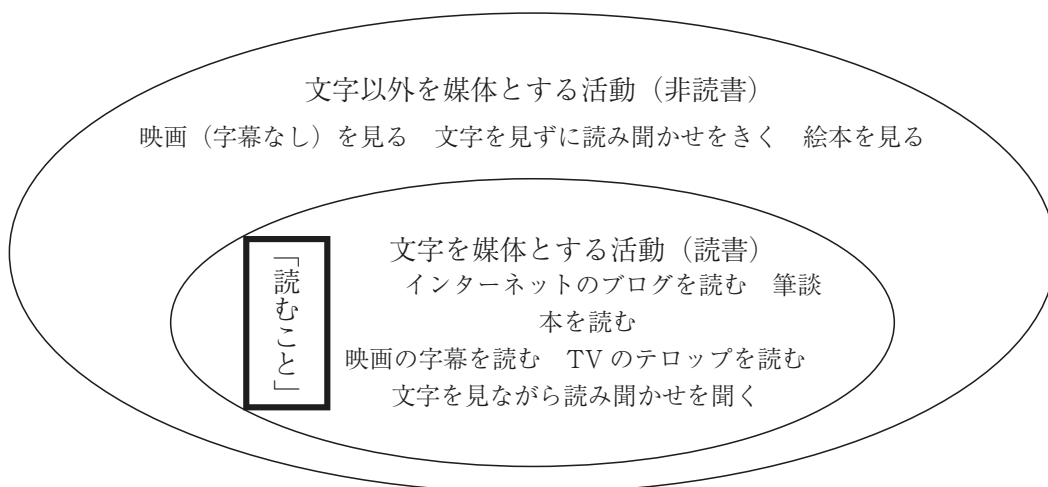


図4 現代型「読書」の定義に基づく分類  
 （注：先行研究をもとに筆者作成。）

## 第2節 現代型「読書力」「国語力」「中心的読解力」の関係性について

まず、現代型「読書力」と「国語力」の関係性について述べたい。従来型「読書」が「国語」の一部に位置づけられていたことから、「読書力」も「国語力」の一部と理解されてきた。しかし、前節で述べたように、「読書」の領域を広く捉えた現代型「読書」により育まれる「読書力」は、従来の「国語」の領域とは完全には重ならないものである。

次に、「国語力」と「中心的読解力」の関係性について述べたい。第1章で述べたように、「中心的読解力」とは「情報の読み取り・取捨選択に関する力」である「読解力」の中心である。また、この「中心的読解力」は従来の「読書」により育まれると理解されていることから、ここで定義される「情報」は、あくまで「書物をベースとした文字情報」と考えられる。しかし、前節でも述べたようにメディアが多様化する中で情報を得る媒体は「書物」だけではなくなっている。したがって、「書物における文章」を読むことのみを扱っている従来型の「国語」だけでは、現代的な「中心的読解力」はカバーできない。

以上から、図3に示した「読書力」「国語力」

「中心的読解力」の関係性と現実における関係性との間には、若干の齟齬が生じていることが分かる。そこで、現代型「読書力」と「国語力」、現代的な「中心的読解力」の関係性について考えたい。

まず、現代的な「中心的読解力」と現代型「読書力」との関係性については、(現代的な)「(書物に限らず文字をなかだちとした)読書」により育まれる「読書力」をより広め、深めたものを「読解力」と捉える原則を踏まえれば、現代型「読書力」は現代的な「中心的読解力」に含まれる要素といえる。次に、現代型「読書力」と「国語力」との関係性については、「書物をベースとした文字情報」のみにより育まれる「国語力」の領域が、「書物を含んだ全てのメディアの文字情報」により育まれる現代的「読書力」の領域にほぼ完全に包含されるものと考えられる。これらを図示したのが、図5である。従来の関連性との違いは図を一見すると分かるように、「中心的読解力」や「読書力」の中に、従来の教科「国語」でカバーできない領域が存在する点にある。では「国語」では育めない現代的な「中心的読解力」および現代型「読書力」を育むには、どのような活動が必要なのだろうか。

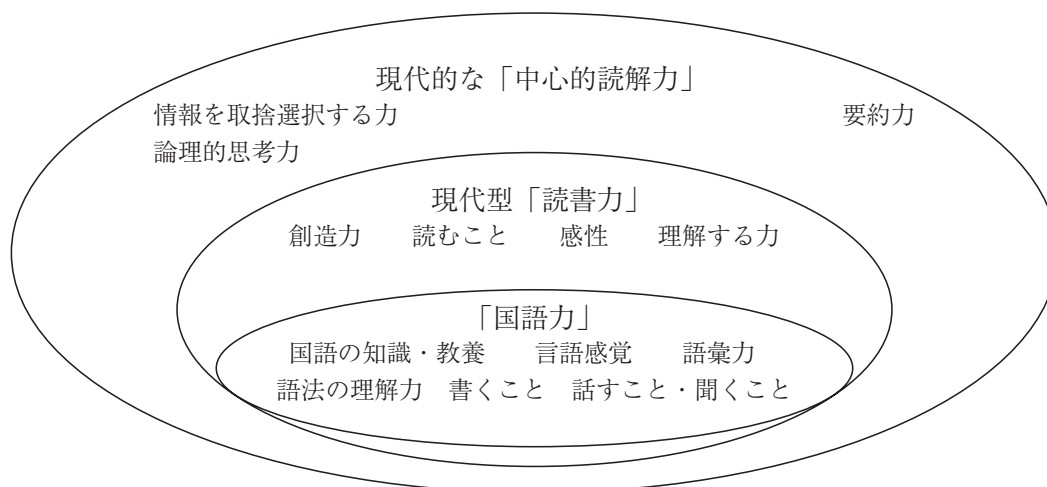


図5 現代的な「中心的読解力」と現代型「読書力」、および「国語力」の関係図  
(注：先行研究をもとに筆者作成。)

### 第3章 現代的な「中心的読解力」 育成のための取り組みについて

前章までの整理から、「国語」だけでは育むことのできない現代型「読書力」と現代的な「中心的読解力」の領域があると述べた。本章ではこの領域に関する効果的な取り組みについて考察したい。第1章で述べたように、現在の「国語」および「朝読」で行われる「読書活動」は、「書物の文章」に対する「読書力」と「読解力」を育てている。先にも述べたように、現在学校で行われている「読解力」育成のための活動に不足しているのは、「書物以外の媒体」を用いた活動である。したがって、取り組みにあたっては教科「国語」や従来の「朝読」の活動時間を利用して、「映像資料の活用」などの書物以外の文字資料の活用がより積極的に求められよう。これらの活動は、現代社会に求められている現代型「読書力」「読解力」を育むために必要だと考える。しかし、もちろん「国語」により育まれる領域も、従来と同様重要視していく必要がある。図5にも示したように、「国語力」は現代型「読書力」、現代的な「中心的読解力」の基盤には変わらない。したがって、「国語」の「書物」媒体における「文章読解能力」も当然重視すべき領域だと考える。

これらのことから、今後の「読解力」育成の取り組みには、「書物」と「書物以外の媒体」の両方の視点が必要だといえよう。そのためには、例えば、月・水・金にはこれまでと同様「朝の読書」を行い、火・木には「映像資料の活用」を行うといったように、両方の活動をバランスよく取り入れるための工夫をする必要があるだろう。以上が、現代的な「中心的読解力」育成の取り組みに関する本稿の結論である。

### おわりに

本稿では、「読解力」育成の取り組みについて述べてきた。その中で明らかになった点について述べたい。

まず、第1章において「国語力」「読書力」「読解力」の関係性について先行研究の整理を行った。ここでは、「国語」と「読書」が直接連動しており、「国語」によって「読解力」が育まると理解されている現状が明らかになった。次に、第2章において「読書」を取り巻く現状について述べた。ここでは「読書」の領域の拡大や、それに伴い変化した「国語力」、現代型「読書力」と現代的な「中心的読解力」の関係性を整理した。最後に第3章では、これからの時代に求められる「読解力」育成の取り組みについて述べた。ここでは、今後の「読解力」育成の取り組みにおける「メディア」活用の必要性についても述べた。

「読解力」は、時代を問わず、人間が生活していくうえで必要不可欠な能力である。メディアが多様化している現代社会において、何らかの情報を「読解」する機会は少なくない。それに伴い、必要な情報を正しく「読解」する能力が今後ますます求められている。情報を含んだ媒体の種類に応じて「読解力」育成の取り組み方を工夫する必要性を強く認識することが本稿の要点である。引き続き「読解力」育成について考察を深めていきたい。

#### 参考文献・参考資料一覧

- ・ 沖山 光『読解の基本的学習構造』明治図書出版、1965年。
- ・ 竹井成夫『読みの力を育てる読書指導』国土社、1988年。
- ・ 白井 勇『読解力調査法』明治図書出版、1985年。
- ・ 森 慎『総合学習で楽しい国語教育』一光社、2000年。



- ・脇 明子『読む力は生きる力』岩波新書、2005年。
- ・斉藤 孝『読書力』岩波新書、2002年。
- ・阿部謹也『読書力をつける』日本経済新聞社、1997年。
- ・朝比奈大作『読書と豊かな人間性』樹村房、2005年。
- ・阪本一郎『現代の読書心理学』金子書房、1976年。
- ・『読解力向上プログラム』文部科学省、2005年。
- ・『これからの時代に求められる国語力について』文化審議会、2004年。
- ・『読書世論調査』毎日新聞東京本社、2006年。
- ・『小学校学習指導要領』文部科学省、1998年。
- ・『子どもの読書活動の推進に関する計画』2002年。
- ・『大辞泉』小学館、1998年。
- ・『広辞苑』岩波書店、1999年。
- ・「朝の読書推進協議会」Web サイト (<http://www1.e-hon.ne.jp/content/sp-0032.html>)
- ・『情報教育にかかる学習活動の具体的展開について』 (<http://www.mext.go.jp/b-menu/singi/chousa/shotou/027/gijigaiyou/060220.htm>)
- ・『OECD 学習到達度調査』 ([http://www.mext.go.jp/b\\_](http://www.mext.go.jp/b_)

[menu/toukei/001/04120101.htm](http://www.mext.go.jp/b-menu/toukei/001/04120101.htm))

#### 注

- 1) 沖山 光『読解の基本的学習構造』明治図書出版、1965年、85～86頁。
- 2) 竹井成夫『読みの力を育てる読書指導』国土社、1988年、13頁。
- 3) 文部科学省『情報に係る学習活動の具体的展開について—ICT 時代の子どもたちのためにすべての教科で情報教育を—』 (<http://www.mext.go.jp/b-menu/shingi/chousa/shotou/027/gijigaiyou/06022011.html>)
- 4) 沖山 光『読解の基本的学習構造』明治図書出版、1965年、195～196頁。
- 5) 白井 勇『読解力調査法』明治図書出版、1985年、21頁。
- 6) 脇 明子『読む力は生きる力』岩波新書、2005年、46頁。
- 7) 沖山 光『読解の基本的学習構造』明治図書出版、1965年、21頁。